

< 国内情勢 >

《 昭和20年8月15日 》 日本の「国体」が最も輝いた日

藤井 巖 喜 < 国際政治学者 >

昭和 20 年 8 月 15 日は日本の歴史の中で、最も悲劇的な1日であった。

その事は誰もが知っている。日本国民が総力をもって戦った大東亜戦争の敗北が決定した日だからである。しかし、その最も悲劇的な瞬間は、同時に日本の国体が最も輝いた瞬間でもあった。悲劇の頂点で、日本の国体は燦然と最も美しいひかりを放ったのであった。

その事に多くの国民が、気が付いていない。それこそが第二の悲劇である。

国体は最も美しい光を放ったが故に、その瞬間から光は衰微を始め戦後社会の混乱が始まった。占領軍による日本の国体の破壊が開始され、それに同調する醜い日本人の群れが出現した。悲劇の頂点は、栄光の頂点でもあった。

これ以上の歴史のアイロニーは存在しない。しかし今や、日本人はそのことすら忘却してしまっている。いや、忘却させられてきたのだ。

その記憶を取り戻すことが、日本国再興の第一歩となる。

「国体の精華」

昭和 20 年 8 月 15 日、日本国民は天皇陛下を守る為に死ぬ気であった。玉砕する覚悟を決めていた。天皇陛下は国民を守る為に死ぬ気であった。それは後に、陛下がマッカーサー元帥と会見された折に明らかになった。

「国民は陛下の為に…陛下は国民の為に…死ぬ気であった。」ここに日本国の国体は、完成したのである。そして最も美しい光を放ったのであった。

それは有史以来初の敗戦という最大の悲劇の中で起きた、奇蹟的な出来事であった。昭和 20 年 8 月 15 日正午の玉音放送を聞く日本国民は、悲壮な決意を固めていた。大部分の国民は、陛下が本土決戦に向けての覚悟を国民に促すものと予期していた。陛下が国民に一億玉砕の覚悟を促されるものと、多くの国民は誰に言われるのでもなく、そのように確信していた。

もっと大事なことは恐らく、日本国民がそのことに納得していたことである。

皇室をお守りし天皇陛下をお守りする為に、日本国民は敢えて玉砕する道を選ぼうとしていた。それが日本国民の務めであり、当然のことと思っていたからである。しかし玉音放送で「陛下は終戦を宣言」された。終戦とは間違いなく、大東亜戦争の敗戦であった。

死を覚悟していた日本国民は、陛下に生き延びることを命じられた。生きて敗戦の焦土に新日本を建設することを命じられた。死ぬ覚悟を固めていた日本国民の多くが、茫然自失したことは事実である。中には「何故、最後の一兵まで戦って滅びよと言ってくれないか」と玉音放送に違和感を覚える者も少なくなかった。

国民の茫然自失は当然の反応であった。御聖断によって救われたということ、日本国民は徐々に納得していった。御聖断に感謝する心は日本国民の間に浸透していった。御聖断によって日本国民は救われた。しかし、その時、国民が見なかったのは、陛下がどれほどの覚悟をもってこの判断をされたのかということである。

天皇陛下は国民を救うために、自らの命を犠牲にする御覚悟であった。

終戦後、陛下が初めてマッカーサー元帥と会見された時に、次の様に伝えたといわれている。「この度の敗戦の責任は全て私にある。国民を苦しめないで欲しい。」

マッカーサーはこの一言に驚愕した。彼は、陛下が命乞いにくるものとばかり思っていたのである。だからマッカーサーは始め、陛下との会談を拒否し続けてきた。「どうせ敗戦国の君主が命乞いにくるに違いない。そんな話を聞いても仕方がない」というのがマッカーサーの態度であった。

しかし「すべての責任は私にある。国民を苦しめないで欲しい」との陛下の一言は、雷のようにマッカーサーを撃った。彼はこれほど高貴な人物はいないと驚愕すると同時に、陛下を尊敬するようになった。このことはマッカーサー自身が自伝の中でハッキリと認めているところである。

「これほど高貴な人物がこの世にいるのか」と彼は感銘を深めたのである。彼は陛下に臣下の礼をとり、お送りしたのだった。陛下は国民の為に死ぬ覚悟を決めていたのだ。皇統は維持しなければならないが、その為にこそ占領軍に責任を問われれば、敵国の矢面に立って死を従容と受け入れる覚悟であられたのだ。その覚悟があればこそ、終戦の御聖断が可能だったのである。

8月15日、国民は陛下を守る為に死ぬ気であった。陛下は、国民を守る為に死の覚悟を定められていた。ここに日本の国体は、完成したというべきであろう。君民は正しく一体となり、ここに「国体の精華」は結実したのであった。

悲劇の最深部において、日本の国体は最高の完成を見たのであった。そして、完成したが故に、それはやがて崩壊せざるを得なかった。最も美しい光は一瞬のものであって、その光が失われた後は、暗黒が支配する時代となった。そしてその後の現在に繋がる暗闇の世界では、国民は国体が最も美しい光を放ったという事自体を忘却させられてきたのである。

「国体」と「政体」の違い

「国体」と「政体」とはそもそも全く異なるものである。

「国体」という言葉は、国家体制の略語と考えても良いであろう。政体とは政治体制の略語と考えてもよいであろう。日本の国体は有史以来不変である。それは、皇室・天皇を中心として、日本国民が団結する形のことである。

天皇陛下は国民の上であり、国民を統治する存在ではなく国民の中心に位置し、国の統合の結び目となる存在である。円の中心のような存在である。

この日本国の国体は、日本という国が始まってから変わらないできた。

「政体」とは政治体制のことである。日本国の歴史において政治体制は何度も根本的な変化を経験してきた。古代の氏族制の政治体制というものがあつた。シナ帝国を模倣した「律令体制」というものがあつた。貴族を中心とする摂関政治の時代もあつた。やがて武士が興隆し、鎌倉幕府から江戸幕府まで長い武家政治の時代というものも存在した。

明治 22 年に大日本帝国憲法が制定されてからは、日本は立憲君主政治の時代となった。大正 14 年に普通選挙法が制定されてからは、議員内閣制の政治体制となった。明治維新では、封建制度が廃止され中央集権的な国家が成立した。このように日本国の政治体制は、何度も根本的な変化を経験している。

それに対して、日本国の国体は不変であつた。日本の歴史を通じて、天皇は常に最高の政治的権威の持ち主であつた。皇室は日本国民の総本家中の総本家であり、天皇はその当主である。国家体制に関わらず民族の中心は、天皇であり続けてきた。それ故に、時の最高権力者は常に、権威の保持者である天皇から日本国を統治する権限を与えられてきた。それが例え「摂政・関白であれ…征夷大將軍であれ…内閣総理大臣であれ…」その権力に正統性を与えてきたのは「天皇」であつた。

今日では形式的なことにせよ、依然として最も重要なことであつた。占領行政によって歪められた今日の憲法、それは寧ろ「占領基本法」と呼んだ方が適切であるが、この現行憲法の規定において陛下が国会に赴かなければ、国会は開会することすら出来ないのである。内閣総理大臣は、陛下のお許しなくしては衆議院を解散することが出来ないのである。

このような意味において日本史を貫いて政体は幾たびか根本的な変遷を経たが、国体は常に不変であり続けてきた。これが日本国の根本的な形である。今日もそれは異なっていない。

「明治維新 150 周年」に思う

今年（平成 30 年）は、大政奉還から 150 年目の年である。

明治維新をイコール大政奉還と考えれば、明治維新 150 周年を祝うべき年である。五箇条の御誓文の発布をもって、明治維新とするならば、来年が維新 150 周年の年にあたる。いずれにせよ、日本人が幕末以来の日本の歴史を振り返るには、絶好の機会である。

明治維新が成功していなければ、アジアに近代国家は一つも誕生していなかったであろう。日本が欧米の植民地主義によって分断されていれば、21 世紀の今日も恐らく有色人種の真の独立は、1 国も世界に存在していなかったに違いない。

もし、日露戦争において日本が敗北していたとするなら、同様のことであったろう。日露戦争に日本が敗北していれば、恐らく日本はロシア帝国と大英帝国によって分断統治され、事実上、両国の植民地と化していたに違いない。

21 世紀の今日、我々が日本語を話していたかどうかとも怪しいものである。

日本の東北部はロシアによって占領され、ロシア語圏となり南西部の日本は、大英帝国によって占領され英語圏となり、日本人は日本語という母国語を既に忘却していたかもしれない。国民が国語を失うのに、3 世代あれば十分と言われている。

日露戦争で日本が敗北していれば当然、世界に有色人種の近代国家は一つも存在していなかったことになる。そうなれば、アジア諸国の独立も、ましてアフリカ諸国の独立など夢の又夢にあったに違いない。

今日のような人種平等の世界は、幕末以来の日本が命がけで切り拓いてきた世界である。日本がなければ、チャイナの独立も…インドの独立も…なかったのだ。

こういった日本国の過去の 150 年にわたって成した偉大な業績を全く忘却させられてきたのが「**敗戦後の 73 年**」であった。

そしてその失われた記憶の最深部に存在するのが「**昭和 20 年 8 月 15 日**」における日本の国体の完成という事実である。それを思い出すことにより、日本人は日本の歴史の総体を思い出すことが出来る。特に幕末以来の苦難の歩みを自らの運命として引き受けることが出来るようになるのだ。